

IV-178 低レベル圏域のイメージ主観について

福井工業高等専門学校 土木工学科 正員 武井 幸久

1. はじめに

生活圏は階層性をもち、その基盤は低レベル生活圏にある。居住者が環境の質を重視する傾向を強め、地区計画制度も7年を経た今、環境カルテ等による分析も進み、そうした小圏域の整備に関する具体的事例も少なくない。本研究はこれまでの検討結果のまとめとして、低レベル生活圏に関する認知・イメージ主観の重要性を示し、地方都市を対象とするその検討法と小学校を核とする検討システムについての提起を行う。

2. 地区とイメージ主観

2-1. 地区

低レベル圏域を模式化すると図・1が得られる。建築が道等のインフラ空間を含む形で近隣を構成し、近隣は各レベルのインフラ空間と共に街、地区、市町村へと組織化される。一般に、圏域は開放・閉鎖の二つの傾向をもつが、安定期では後者の特性が強く、特に、小圏域ではある程度の閉鎖性が評価されてきた。

例えば、リンチは居住地規範に関して閉鎖性を評価し、我国でもコミュニティ育成型の居住地が建設され、建築分野では近隣形態の社会性、土木分野でも歩車共存道路等の手法を中心に検討が進められている。

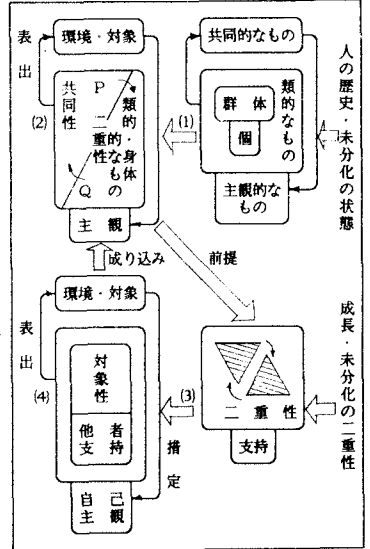
だが、現状の地区へと観点を移すと、建築と前面道路（接道義務）が圏域の基本要素となる。しかも、道路は「単独の道路は存在せず、全ての道路は唯一の道路」というパラドキシカルな施設である。この様式がイメージの根底を成し、モータリゼーションへの適応化が過度に進めば、街路、強いては低レベル圏域が均質な空間へと画一化される恐れがある。

2-2. イメージ主観の特性

人の行動はイメージ主観を基盤とする。図・2は主観の変遷を示すものである。歴史的にみると、(1)主観的なものが群の分節・統合に応じて事物を共同的なものへと分化させ、(2)主観は共同性Pと類的・身体的なものQ（全体性）

の二重性をもつことになる。他方成長では、他者(2)の支持の下で(3)環境を受動的に対象化する方法、(4)対象性と支持をPとするQとの二重性を学んで(2)へと成り込む逆立ちしたプロセスを辿る。

図・3は、この過程を圏域イメージの螺旋系列として示したものである。まず、(i)子供は他者の支持下で環境のイメージを受動的に形成し、その交換により現状肯定の主観を共有化



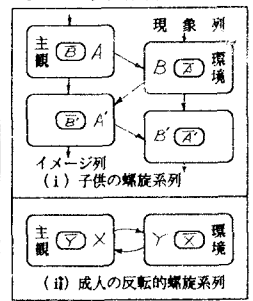
図・2 主観・共同主観に関する概略図

していく。一方、(ii)成人はほぼ確立したイメージを基に行動し、圏域の問題点を主観との乖離として意識化する。そして、環境の改造により両者を整合化する。

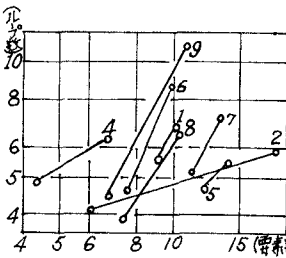
そのため特定モードが優勢になれば、共同性レベルの不明確化、先述の画一化が導かれることになる。

表・1 調査対象地区（小学校区）

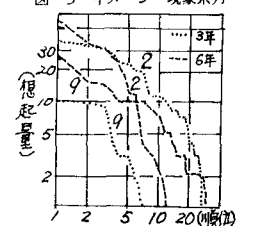
1	成器西	勝山市中心街
2	順化	福井市中心街
3	旭	福井市中心部周辺
4	有終西	大野市中心街
5	武生東	武生市中心街
6	松岡	福井市近接町
7	宝永	福井市中心部周辺
8	惜隆	鯖江市中心街
9	麻生津	福井市郊外



図・3 イメージ・現象系列



図・4 認知マップのループ数と要素数



図・5 エレメント想起数とその順位

